

2003 Juvenile Cultural Society

目次

一、二〇〇三年度 活動報告

幹事長より

会計より

夏合宿

三田祭

春キャラバン

浅貝子ども会

いくさばた子ども会

新橋子ども会

高橋 利博

金田 緑

宮崎 美里

田中 覚歩

田中 梨絵

古谷 まどか

坂 慎弥

河村 美樹

早水 慎一

鳩野 将太

伊藤 綾子

清崎 葉子

佐野 匡

佐藤 崇文

童話会

文化財

二、卒業生寄稿文・紹介文

三、キャラバン委員長より

編集後記

岡本 真由子

福元 彰朗

甲斐 梨緒

田村 敦

廣澤 勇也

2
0
0
3
年
度

活
動
報
告



幹
事
長
よ
り

大切なこと

二〇〇三年度幹事長 高橋利博

オリエンで勧誘を受けた人、あるいは勧誘をしたことがある人は、おそらく次の言葉を耳にしたこと、あるいは口にしたことがあるだろう。

「うち（児研）は自由な（自由が多い）サークルだよ」
では、「自由（が多い）」とはどういうことだろうか。

私達児研は五つのパートに分かれて活動し、活動は週一〜二日で、各児研員は好きなパートを選んで活動に参加できる。普段の活動、あるいは全体活動を見ても、活動への出席に関して（パートにより違いはあるが）そこまで厳しくない。だから、パートを掛け持ちし児研の活動に打ち込む人もいれば、他の活動で忙しいのでパート活動は最小限にとどめる人もいる。つまり、時間的拘束を多くせず、児研の活動以外にも他のことができるようにしているということが、児研は「自由（が多い）」という理由になるのだろう。私はこの「自由」を非常に魅力的だと感じているし、この魅力、児研のよさを今後も大切にしてほしいと考えている。

そのような中で、私が投げかけたい一つの疑問がある。それは、「自由」の解釈である。結論から言えば、「自由」であることを、「テキスト」でいい、と解釈してほしくないのだ。

私が「テキスト」ということに関して懸念するのは、活動の質の問題である。近年、私達児研はパートごとの独立が強まり、（私もだが）一パートだけという人も多い。そして、自分の所属するパート以外にはほとんど関わりのない人も増えている気がする。それは上述したように、他の活動等で忙しいからという人もいるだろうが、児研という活動組織そのものに対する意識や意欲（モチベーション）が薄れてきているという事実もあるのではないだろうか。それが、活動への参加率の低下などといった問題に表れている。パートにはチーフという責任者が、そして児研そのものには四役という責任者がいるが、児研員の活動に対するモチベーションがこのまま低下していったら、責任者に責任と仕事を押し付け、活動に参加したいときだけ参加し、テキストに楽しんでいくという人（フリーライダー）が多数出てこないとも限らない。そうなると、活動そのものの存在意義が薄れ、下手をすれば私達の活動そのものができなくなる恐れすらある。

というのも私達の活動は、「子どもたちを対象としたボランティア活動」である。私達の活動は、小学校や児童施設をはじめ、OBOG、大学など、多くの方々のからの信頼のもと成り立っている。その信頼は一旦崩れてしまえば、元通りにすることは難しい。だからこそ、活動に対する意識の持ちようは大事なのだ。テキストであることがいかに問題であるかはお分かり

いただけるだろう。私達児研は、いわゆるお遊びサークルとは違うのだ。

ここで注意していただきたいのだが、私は厳しくしろ、と言いたいのではない。最低限のけじめと意識だけは持つてもらいたい、と言いたいのだ。毎回きっちり活動に参加し、やるべきことをやる、というのはだれでも最低限できることだし、何ら厳しいことを課されているわけではない。チーフ四役のような責任ある立場にいらなくても、普段忙しくても、毎回活動にはしっかり参加し、きっちり仕事をしてくれる人も多々いるのだ。

組織が大きくなればなるほど、何もしないで好き勝手やっているフリーライダーが増えるのは仕方のないことであり、それを責任者だけの問題にすべきではない。組織全体の問題とすべきである。一人一人が意識をしっかり持ち、活動に取り組めばそういった問題は解消されるはずだ。特に、下級生へのマイナスの影響は上級生の態度によるものが大きいから、上級生は気を引き締める必要もあるだろう。だからといって特別な能力は必要ない。最低限のけじめを持って、とにかく活動を楽しみ、盛り上げていこうという意識を持って活動に参加していればそれでいいと思う。大学時代には児研というサークルに打ち込んだ、と自信を持って言えるようならば、それで十分なハズだ。

私は幹事長の任期中、多くのOBOGの方々と話をする機会

に恵まれ、児研の昔話やさまざまなエピソードなどを多々聞くことができた。昔のOBOGの方々に聞くとところによると、（大？）昔は今のようにはっきりとしたパートの区別がなく、ほぼ全員が童話を書き、劇を演じ、子どもとふれ合っていたらしい。今に例えれば、三パート以上の掛け持ちということになるだろう。当時の方々は、大学生活のほとんどを児研の活動に注いでいたのかもしれない。それはそれで充実した学生生活ということになるだろうが、今は今で十分充実した学生生活を、サークル活動を送れるはずである。活動に参加していくにつれ、児研がどれだけ長い歴史を持ち、どれだけ多くの方々に支えられてきたかということがわかるはずだ。そして、児研というサークルにおいて、何が大切かということもわかってくるだろう。これらのことは私が幹事長を終える頃になって考えるようになったことである。実は、私の所属する児研以外の組織でも似たような事例があったので、あえてここで思うところを述べさせてもらった。今頃になってこのように偉そうなことを言うて申し訳ないが、幹事長を務めた者の一意見として、今後の参考（？）にしていたら幸いである。最後に、私のような微力な幹事長を支えてくれた方々、特に同学に感謝したい。



2
0
0
3
年
度

決
算
報
告

2003 年度本部会計決算報告

平成 16 年 5 月 1 日

〔収入〕

前年度繰越金	200,070
部費 ¹	455,000
大島西澤記念基金	40,000
文連交付金	58,000
今年度『童話の森』売上	36,000
昨年度『童話の森』売上 ²	51,200
繰越金回収(パート) ³	60,773
受取利息	1
計	901,044

〔支出〕

パート補助費	244,904
浅貝	70,082
いくさばた	8,577
童話会	54,916
文化財	111,329
夏合宿補助費	70,000
三田祭補助費	100,000
春キャラバン補助費	55,000
機関紙『BON』製作費	735
記念品補助費	6,600
ボランティア保険代 ⁴	23,700
雑費	300
計	501,239

〔次年度繰越金〕 901,044－501,239＝399,805⁵

本部会計 金田 緑

¹ 1～3 年:7,000 円×56 人, 4 年:2,500 円×22 人, 途中入部者:4,000 円×2 人。

² 行方不明になっていた昨年度の売上が見つかったため, 収入として計上しています。

³ 昨年度まで過去数年間蓄積されていた各パートの繰越金を回収したものです。今年度の各パートの繰越金は予算から引いた形で支出のパート補助費に反映されています。

⁴ 毎年部員全員が加入している保険代です。1 人当たり 300 円, 79 人分です。

⁵ 繰越金が倍増していますが, パートの繰越金回収や昨年度の『童話の森』売上金等は今年度限りのものであり, また O B の方からの活動援助・文連交付金の増額といった外部からの資金に恵まれたためです。

夏合宿

二〇〇三年度夏合宿 活動報告

はじめに

おかげさまで、前年度の夏合宿は無事に終了しました。この活動は、児童文化研究会当時三年生をはじめ、児研全員の存在あってこそ完遂できたことでした。皆様への感謝をこめて精一杯報告させていただきたいと思います。

一、準備及び計画

三月末、日吉の中央通にある代理店フェニックス観光に出向く。越後湯沢、清里、片品村（尾瀬）の三つの候補地を示される。今年は、子ども会も開催する予定だったので、距離もほどどなるべく広々とした自然の多い片品村に決定。

五月一日、私はじめ三年の市東、澤田、橋本で下見。現地の宿、山楽荘の方々にあいさつ。私、橋本で打ち合わせと交渉、市東、澤田が周辺地理の確認後、全員でレク、子ども会の会場になりそうな場所を探索。宿で夕飯をこちそうになり、その後帰京。内部広報をはじめ。

五月三十一日、私、浅貝チーフの早水氏、新橋チーフの佐野氏

とともに夏合宿子ども会企画の話し合い。現地での宣伝方法を決定。佐野氏には具体的な企画内容を考案する主任になっていただいた。

六月、七月の委員長の仕事。外部広報と内部広報。外部広報は、主に子ども会の現地での宣伝。宿の方には、同業者にビラを配ってくださることになり、教育委員会の鈴木さんという方に、全村の小学校と児童館にポスターを貼っていただくことになった。ポスター、ビラの作成には、三年の江崎氏、一年の鳩野氏に大きな協力をいただいた。教育委員会には、児研の紹介と活動実績書を送らせていただき、子ども会活動のご理解をいただいた。内部広報は、児研員に向けての夏合宿参加の呼びかけと子ども会員募集のお知らせが中心。日吉ルームの宣伝には、三年生の佐藤氏に細かいフォローをいただいた。

六月、七月の子ども会の仕事。メンバーは、隊長の佐野氏をはじめ、各学年の有志の方々が2ヶ月という長期に渡って、ミーティング、製作を重ね本番に備えました。毎週土曜日の午前を使って、計6回の会合とその他多くの時間を割き準備をしていただきました。彼らは、当日も気を許さず最後まで準備に神経を使って下さり、委員長として本当に頭が下がる思いでした。とくに佐野氏、早水氏にはチーフという本職もありながら、メ

ンバーを精一杯まとめていただき、今でも何て申し上げてよいかわからない。

七月二九日、委員長はじめ、三年の伊藤、佐藤、澤田、市東、佐野、橋本で最終的な夏合宿全般の企画内容の詰めをする。この日は大雨のなか、朝から綱島のイトーヨーカドーまで酒類を買いだしに行く。綱島在住の吉田氏（当事二年）にも手伝っていただいた。

二、本番及び実行

七月三一日午前八時半、日吉ルームの荷を子ども会隊長はじめ、数名で外に運ぶ。集合前に、雨がぽつぽつとふりはじめた。九時、皆が集まりだす。木漏れ日よりもまぶしい笑顔がそこらに溢れる。そのうち、バスが到着。運転手と打ち合わせ。振り向くと、4年生の徳留さんが、皆を見送りにきてくださっていた。九時四五分バス出発。

バスの中は、佐藤、橋本によるバスレク。全児研員の名前のマジカルシャッフルがバスを爆笑空間に変えてくれた。幸運なことに、雨はあがり、雲間から光が差し込んでいた。途中、赤城SAでお昼休憩をとり、午後二時半に群馬県片品村越本の山楽荘到着。しばらく部屋で休憩をとる。

三時レク開始。前半は、宿前の広場でバレーボール。後半は、宿のマイクロバスをお借りし、スキー場で三年清水氏考案のゲーム大会。阿部、伊藤、江崎、佐々木による司会進行、審判、準備のおかげで予定通りにレクが終わる。六時半夕食。片品の恵みに感謝をしていたく。

八時、村の花火大会を見に行く。宿の方が、マイクロバスに加え、バンを出してくださり、無事全員、暗闇のなか会場に到着。花火は、大きくそして丸かった。その向こうで、星たちが恥ずかしそうに微笑んでいた。そして私にとって、照らされたみんなの輝いた顔が世界でたった一つの大変な花火だった。九時一五分、無事帰宅。その後、学年飲み。とにかく色々なことがあった夜だった。同学の配慮で私は先に寝かしてもらった。

八月一日、六時ころ佐野氏とともに奥さんに連れられ、集落を周遊。ラジオ体操に来ることもたちに子ども会の宣伝をする。八時の朝食後、座敷で佐野氏による子ども会の事前説明会。前の晩、私が寝ていた間もメンバーとともに徹夜をして作業をしてくださった佐野氏の真剣な表情。説明会の後、三年の岡本氏の司会、江崎氏の読み手のもと、座敷で百人一首大会。眠気も吹き飛ぶ白熱振り。二年の稲嶺氏が託児所の仕事を終え、東京からかけつけてきてくれた。昼食をはさんで、一時半まで休息。そのうち、宿の外に子どもたちの声が聞こえてくる。

二時、子ども会開始。スキー場は、太陽の熱で燃え盛っていた。子ども三九名、大人三六名の脱水症状と日射病が心配された。宿の方が急遽、お茶とジュースを用意してくださった。二時間にわたるオリエンテリングは、大盛況。これは、本当に本当に佐野氏と皆あつての成功だった。本当にみなさん、おつかれさまでした。ありがとう。

夕飯前、二日目のためだけに三年の甲斐氏がきてくれた。そして、前の晩にいっきに減った種類を伊藤、金田氏が買いだしに、行ってくれた。

夕飯は、宿の外でバーベキュー。傍らに咲く花が夕方の涼風にゆれていた。奥さんとご主人が、先に鉄板をあため用意をしてくれていたのすぐご馳走にありつけた。千円の夕食を半額にしてもらったはずなのに、量はあきらかに変わっていなかった。合掌。

九時、大納会。市東、橋本氏による司会進行。ほんとにすてきな夜だった。みんなの素顔が心にしみた。これも、盛り上げてくれた二人と皆のおかげだった。その夜もまた先に寝かしていただいた。

八月二十時、宿出発。山楽荘の方々に深くお礼を申し上げて、農園「みのり農場」に向かう。みのり農場では野菜狩りをする。農園を経営するご夫婦が親切に説明をしてくださった。

トマト、グースベリー、イモ類などがとれた。トマトは、その場でジュースにしたり丸かじりしたりできた。お昼は、農場の木陰で、宿の方が握ってくれたおむすびをほおばる。農場のレストランも人気。まだ青いもちし畑で、ハーモニカを吹く。最後に、ご主人にお礼を申し上げ、一時半、日吉に向けて農場出発。

五時、日吉到着。往復とも児研員の命を預かっていただいた運転手さんに一同お礼を申し上げ、解散。

八月十日 山楽荘の奥様、教育委員会の鈴木さん、スキー場を貸してくださった入澤さん、みのり農場のご夫婦にお礼の手紙を書く。後は、二年の高村氏とともに膨大な会計処理をまつ。

三、まとめと反省

命に代えるものは、何もない。それを肌身に感じた体験だった。そして、自分ひとりでは何もできなかったこの活動で、私は改めてこのサークルの懐の深さを感じた。時間配分や子ども会での準備、安全管理など、いたらないことが多く、これは同僚や皆の協力が私を支えてくれた。

むすび

私が以上の報告ができたのも、数々の人のおかげです。そして、OBの皆様には、これからもあたたかいまなざしで、現役の活動を見守ってくださいよう、お願い申し上げます。

前年度夏合宿委員長 宮崎 美里

ぼくの児研日誌ゝ夏合宿・君がいた夏の日ゝ

法学部政治学科二年 田中寛歩

夏合宿。

それは、この児童文化研究会のメンバーがパートの壁を越えて集う一大イベント、そして、当時自分が児童文化研究会に入ってから、初の全体活動でした。

自分は当時さまざまなパートにお邪魔しており、先輩から「君はもう新入生だって思わないでいいよね」など、ありがたいように実はあまりありがたいような言葉を賜るほど児研に馴染んで(?)いたのですが、やはりパートが違ったりする方とはあまり接する機会はありません。そこにこの夏合宿。親睦を深める大チャンス到来です。そして何より、親しくなった友人達との時間の共有。これはもう、否応なく期待は高まっています。

しかし、別に予定がある、夏季集中授業をとっちゃったetc.で参加人数はあれよあれよと言う間に減っていき、結局一年生の参加者は六名(うち男子五名...)。少しがっかりしつつも、上級生が大勢来てくださるのだし、と納得しました。

さて、何はともあれ出発です。だんだん日吉から遠ざかっていく景色を見つめながら、もう脳裏にあったのはこれからの期

待ばかり。夜の飲み会、酒、飲み会、酒、飲み会、酒・・・もとい、子ども会をはじめとする楽しい企画、豊かな自然と新鮮な空気、皆との語らい・・・そんなことに思いを馳せているうちに、宿に到着です。

到着してまず驚いたのが、皆のはしゃぎよう、まるで子供のようです。いや、童心に帰らずしてなんの児童文化研究会か。自分も負けじと童心に帰って大暴れです。

そして皆が疲れきった後は、夕食、そして個人的に非常に待望の飲み会です！飲んで語って、また飲んで語って・・・それまで知り得なかった同学、そして先輩方の真の姿を垣間見ることができました。

H澤さん、これから児研で、いや大学生活においてどう過ごすべきかをご教授くださり、本当にありがとうございました。あの時のお言葉は、今でも僕の心にしっかりと刻んであります。ただ、トイレの個室にたて籠って語るのはどうかと思います。そして翌日は子ども会です。延々と疲れを知らず斜面を走り続ける子供たちと、すでに疲れきっている自分を比較して、少し淋しさを覚えたり・・・。

宿に帰ったら、また食事、そして飲み会です。

飲み会では学年の出し物もなんとか終わり、一安心です。新橋チーフの奥義、首振りも見られたし、大満足でした。

そして三日目、夏合宿ももう終わりが近付いてきました。今

日は菜園で野菜狩りです。青い空と白い雲、そして一面に広がる緑色の野菜畑のコントラストは、今でも鮮明に思い出せるほど鮮やかなものでした。

木漏れ日の下で、多少の二日酔いと睡眠不足でまどろむ意識の中、微かに聞こえてくるのは皆の笑い声と美里さんの奏でるハーモニカの音・・・この大学に入って、そしてこのサークルに出会えてよかった。なんとなく、そう思いました。

たくさん遊んでたくさん語ってたくさん遊んで・・・こうして、夏合宿は終わりを迎えました。季節はまだ八月の序盤、夏は始まったばかり。とりあえずバイトとか恋とか(いずれ両方とも挫折...)、なんか青春っぽいことしてやるぞ! そう思う僕の頭上で、銀杏並木のセミがせせら笑っていました。



三 田 祭

Anything But Ordinary

文学部人文社会学科西洋史専攻4年

新橋バート所属 田中梨絵

カナダのロックシンガー、アヴリル・ラヴィーンが言った。
「今の状態に満足してるの？息をしているだけで十分なの？
私だったら、普通なんてつまないよ」

「同感！」と答えた私は、三田祭委員長になっていた。

1年の時からずっと児研の三田祭に参加してきて感じたことは、児研の三田祭は外部の人をもてなすものであるということ。私は委員長になって、このことに加えて児研員をもてなす三田祭であって欲しいと強く思った。全体活動としての三田祭が、外部の人への児童文化研究会の活動発表の場に留まらず、先輩・同学・後輩と同じ時に、同じ空間でスパークできるそんなイベントになってくれたら……こんな思いで委員長としての仕事をこなしていた。三田祭委員長としての仕事は、他の人の目には「大変」で「忙しい」仕事と映ったかもしれない。しかし今、三田祭委員長だった自分を振り返ると、そんなマイナスイメージは自分の中にはない。建前で「三田祭委員長はかなりキツイっす！」って言っても、その語り口調と笑い飛ばし方か

ら本音は読み取れる。もしかしたらM松さんやK田さんなど、委員長を経験してきた人だけしか読み取れないかもしれないが……。自分の中にマイナスイメージがないのは、三田祭委員長という立場が、少しずつ自分を成長させてくれる材料になっていたからだ。

言葉で自分の気持ちを表現することが苦手だった私は、何度かみんなを不安な気持ちにさせたことがあった。委員長になる以前の自分なら、どうすればいいかわからず、ただ悩むだけだったかもしれない。しかしあの時の自分は、素直に自分の思いを伝えることでみんなに自分のやりたいことや三田祭に関するヴィジョンを理解してもらおうと考えた（1ステップ）。どんなに些細な疑問でもいいからみんなの三田祭に対する感覚みたいなものを知りたくて、アンケートや三田祭ウォーカーを作成したり、準備期間にいろんな人に話しかけた（2ステップ）。前の自分だったら、仲のいい子に聞いてわかったつもりになっていたはずだ。委員長という肩書きがみんなと仲良くなるためには必要ないと感じ、勝手に「ナシュー南」に変えた（3ステップ）。委員長はピラミッドの頂点なんて考え方は自分にとってはナンセンス。ピラミッドの上において、下に降りてこれないなら役立たずの委員長だと思った。これは今までの自分自身のリーダー経験から感じたことでもある。言うことだけ奮っていて行動が伴っていないやダメ人間。なんだか三田祭委員

長になって責任感もかなり強くなったようだ(4ステップ?)。

三田祭委員長という仕事を通して、一回りビッグになったと思う。それは、みんなが自分を構成するパーツになってくれたからだ。私は委員長になってからこのことを強く願っていた。一人で何かを作り上げても、それは所詮、自己満足でしかないと思い、みんなで一つのものを作り上げたかった。三田祭が終わるまでずっとこのことが頭にあり、打ち上げの際にも結果として自己満足になっていたかもしれないとずっと不安で、何回も自分の心に問い続けていた。しかし、打ち上げの際のみんなの笑顔・みんなで感じた達成感や感動は、そんな私の不安を吹き飛ばしてくれた。同じ時に、同じ空間で、同じ思いを抱けたことはとても貴重なことで、忘れることのできないこと。打ち上げで私を構成するパーツの最後の一つは埋まった気がした。

合言葉は「Make me smile !!」

それが2003年度三田祭。

みんなの笑顔がみんなのパワーになった。

三田祭を通して

古谷まどか

2003年、十月、私が児研に入った頃はもうすでに十一月の三田祭に向けての準備は始まっていた。まだ児研には全く馴染めていなかったが、もうすでに動き出している三田祭というビッグイベントへの準備の流れの中に組み入れてもらったといった感じだった。

児研の三田祭での活動で私がちよつとでも関わらせてもらったのは、駄菓子テントの店番、子ども会、ちんどん屋、童話会の紙芝居と『童話の森』の製作だった。かねてから、私は三田祭で着ぐるみを着たいと強く願っていたので、ちんどん屋では兎の着ぐるみを着て匿名の自分になり、キャンパス内を歩くことができて本当に楽しかった。(着ぐるみでキャンパス外にも出たかったが、色々な意味で危険だと考えたので取り敢えずやめておいた。)紙芝居公演では拍子木を叩くことがとても楽しかった。

活動の中でも最も印象に残ったのは子ども会だった。三田祭での子ども会はそれぞれの日にちで担当者が違い、違う内容のものをやるというものだったが、それまで子ども会といったものを経験したことがなかったのが当日までどんな感じになるのか全く想像できず、とにかく不安だった。それでも先輩方

が一年生の意見をなるべく取り入れようとして下さり、常に一年のことを考えて下さっていたことを非常に感じた。子ども会の本番では全てが予定通りに進まなかった(ように思う。)この時、ゲスト参加で来てくれた人たちに本当に助けられた。でも先輩の担当した子供達のグループを見たら、先輩はうまく子供的心を掴んでいてすごいと思った。この子ども会を通して子ども会はどんなに準備しても予定通り進むことはまずないし、子供達を引き付けて楽しませることの難しさを感じた。これは後の全体活動の春キャラバンで子ども会をもう一度やってみようと思うきっかけとなった。三田祭での子ども会は自分ではとてもうまくいったとは思えないものだったけれど、自分なりの課題を見つけることができ、よかったと思っている。

もう一つ、印象に残ったのは打ち上げでの、三田祭委員長や、107の装飾、ちんどん屋、駄菓子テント、子ども会などなど、それぞれの担当責任者を担った先輩方へのコール(と言うのかな)だった。例えば「子供達がたくさん集まる素敵な駄菓子テントを作ってくれたのはだれだろー」といったような。打ち上げで急にはじけた児研のテンションには驚いたけれど、それぞれの担当の人の仕事の苦労にみんなで感謝の意を表す児研の打ち上げのスタイルはいいと思った。

三田祭では最初から準備に加わっていたわけではないけれど、少しでも関わって感じたことは大きなことを成し遂げるに

はやはり一人の力ではできないということ、助けてもらうことばかりだったけれど、人が協力し合うことのすごさを感じた。また、この全体活動を通して、多くの先輩方、他パートの同学年の人々に会うことができたのも収穫だった。それから、児研の先輩方は常に一年生や周りのことを気遣い、よく考えて下さっていて、しかもなれ合いで活動はしてない所が素晴らしいと思った。

今年、また新たに新入生が入ってきてくれていて、私ももう二年で上級生だが、今の三年生や四年生、今までの児研の先輩方のように全体活動やパート活動を通して周りや一年生のことを考えられるような上級生にならなければならないと思う。



春 キ ャ ラ バ ン

児研 総合活動イベント・春キャラバン（下仁田にて）

春キャラバン委員長 坂 慎弥

二〇〇三年度 春キャラバン報告

開催地・ 群馬県 甘楽郡 下仁田町

期間・ 二月二十九日―三月六日

内容・ 劇公演 人形劇『トム・ソーヤーの冒険』

（五公演）影絵劇『オペラ座の怪人』

子ども会 『下仁田 春の大運動会』

「今回の春キャラバンは、

どのパートからでも参加しやすいような活動にしよう。」

…と、動き出した春キャラバンでした。

…それは、全体活動としての認識が浅いからです。ここでは「春キャラバンって？」という方のために、簡単に説明します。

春キャラバン（通称：春キャラ）では、春休み期間にある地域の小学校をまわり、子ども会・劇公演を行います。そこには様々な活動姿勢が凝縮されています。いよいよ上級生になろうとしている一年生から、児研最後の思い出にしようとする四年生、今までの子ども会・劇公演経験を活かしたい人から、初めての子ども会・劇公演にチャレンジしてみたい人など多岐に渡ります。

そんな春キャラバンは夢・願望のつまった素晴らしい企画ですが、明るく楽しただけでなく、辛さ厳しさも含んでいます。出発前の一ヶ月間、劇組は朝から晩まで練習に励みます。また、子ども会組は五十人とも百人とも考えられる子ども達に楽しんでもらえるよう、想定に想定を重ねなければなりません。キャラバン地に着いてからも、子ども達が登校する前に小学校に入り、日が暮れてから宿に帰り、夜にはミーティングといったハードなスケジュールをこなさないといけません。

しかしそんな辛い思い出も、それぞれ充実・満足の思い出につながっています。出発前の準備期間があるからこそ、別パートや別学年で話す機会がなかった同士でも仲良くなれるし、普段は見えない真剣な表情を垣間見ることが出来ます。現地でのハードスケジュールも、子ども達の笑顔が辛さなんてものを吹き飛ばしてくれます。そして何よりも、一つ一つの経験がみんなの気持ちを「子ども達のために！」と一つにするよう、貢献しています。

キャラバンはじめの五日間は各小学校をまわりました。低学年には人形劇、高学年には影絵劇を見てもらい、その後私たちは各クラスで子ども達と一緒に給食を食べ、お昼休みには遊びました。活動をしている中では、子ども達や先生方や教育委員会の皆さんから沢山の嬉しい言葉を頂くことができました。

公演中には、

「おもしろいー!」「きれいー!」と口に出してしまう元気な子。

「・・・」と画面に食い入りながら言葉にならない声を出す子。

昼休み後、別れ際には、

「ありがとう、楽しかったよ!」と笑顔を見せてくれる子。

「もう帰っちゃうの?」と寂しげに手を握って離さない子。

学校を離れるときの先生との挨拶には、

「子ども達があんなに喜んだ顔を久しぶりに見ましたよ。」

「これからみなさんの素晴らしい活動を頑張ってください。」

キャラバン最終日には子ども会『春の大運動会』を開催しました。当日の朝には(季節外れの)雪が降る寒い日にもかかわらず、開会式が始まる頃には大勢の子ども達が集まりました。再び会えた子ども達が、遠くから私たちの名前を呼んでくれる姿は、まさに感動の瞬間です。一ヶ月間準備してきた企画・道具は、子ども達そして私たちの喜びへと形を変え、子ども会は大成功を収めることができました。

春キャラバンの活動時期は、年度の最後であり、新年度開始直前です。そのため私にとって、過去三回の春キャラバンは成長の場でした。(一年生時にはいよいよ児研一員として先輩となる自分、二年生時には執行学年となる自分、三年生時には

一時引退をして活動を見つめなおす自分。)そして最後は、

・個人として児研から学んだものの集大成、みんなで育ててきた児研としての集大成を作り上げることができるよううか

・これからの児研を担う後輩達が、どのようにこの春キャラバンを“成長の場”として活かしてくれるかと。

これがラスト春キャラバンへの意識・取り組みでした。

そして春キャラバンが終わり、大満足することのできた自分がいます。となると残すは、後輩達がどのように成長できたか、です。しかしそのようなものは、まだまだ目に見えてくるはずがありません(ー)。今年の、来年の、そして再来年の児研がどんな素晴らしいものになるか、一卒業生として期待しつつ見守らせていただきます。

現役のみなさん、これからも頑張ってください。

素晴らしい児研と素晴らしい自分を創りあげてくださいね。

最後に。私一人では、児研総合活動イベント・春キャラバンを成功させることはできませんでした。(全員へのメッセージ)

ジを載せることができず申し訳ありません。)

井上尚人君。外務交渉という重責を果たしてくれてありがとう。君がいてくれたからこそ、キャラバンも開催できたし、大満足なものに仕上げることができました。難しい立場だったろうけど、うまくできたのは四年間で培ってきたコンビ力ですね(笑)。

村松壮介君。子ども会開催ナシでは、私の気持ちの上で大失敗な春キャラバンでした。子ども会隊長の大役を引き受けてくれてありがとう。そして子ども達の素敵な笑顔を見せてくれてありがとう。迷探偵コニヤンも立派に出世したよね、君の笑顔も素敵です(笑)。

土屋千尋さん。演出家コンビがあなたでよかったです。委員長兼影絵演出家であたふたしていた私を、あなたが気づかせてくれたからこそ、うまくやり遂げることができました。お互い大満足の劇を作り上げられたと思います。『トム・ソーヤーの冒険』に参加できなかったのが心残りです(笑)。

多くのパート、多くの学年の皆さんの参加があったからこそ、児研総合活動イベント・春キャラバンができました。感謝の気持ちを込めて、参加者を紹介します。

【春キャラバン参加者】

人形劇 演出家 土屋千尋

一年生 谷口修平

二年生 小川未樹・滝戸まゆみ・寺嶋智子・廣澤勇也

三年生 早水慎一

四年生 井上尚人・土田隆仁

影絵劇 演出家 坂慎弥

一年生 田中寛歩・田村敦

二年生 稲嶺清志郎・高村大・服部さくら・町永千春

四年生 竹澤洋子

子ども会 隊長 村松壮介

一年生 赤股由三枝・河村美樹・鳩野将太・古谷まどか

三年生 岡本真由子

四年生 高橋志奈子・徳留隼人・福田真理子

設営補助参加

三年生 甲斐梨緒・金田緑・高橋利博・宮崎美里

製作参加

三年生 佐野匡

四年生 入江慶太

春キャラバン委員長(内代表) 坂慎弥

(外代表) 井上尚人

私にとってのキャラバン

河村美樹

私は、群馬県甘楽郡下仁田町で行なわれた春キャラバン、その最終イベントである子ども会に参加しました。今回の子ども会は「春の運動会」。当日は天候が悪く、一時開催が危ぶまれた運動会でしたが、そんな悪天候の中でなんと約50人の子どもが参加してくれました。子ども達は校庭に來た途端、劇公演で仲良くなったお兄さん、お姉さんに飛びついて大はしゃぎ。私も混ぜてもらい、運動会が始まるまで何人かの子どもと遊びました。運動会はチームに分かれて「人間玉入れ」「キャタピラーリレー」「長なわ」「指令ゲーム」などのゲームゾーンを順に回っていく形式。その中でも一番盛りあがったのはなんと言っても全チーム対抗の「障害物リレー」でしょう。どのチームも必死に走者を応援し、子どもも児研員も一丸となって楽しんでくれました。運動会が終わった後、うれしそうに参加賞を抱えて帰る子ども達を見て頑張って準備して良かったと思います。怪我人も出ず、運動会は大成功だったと思います。

秋から児研に入り、同じパート以外の人とあまり関わりがなかった私にとって、春キャラバンはみんなと仲良くなる良い機会でした。そして、このキャラバンに参加して、もっと児研に

関わりたいと思うようになりました。それは最後の機会に四年生と出会えたことが大きかったと思います。児研の活動の集大成であるキャラバンに懸ける四年生の思いは相当のもので、明るく場を盛り上げつつも仕事を的確にこなす四年生に準備段階から圧倒されっぱなしでした。そんな四年生に憧れ、次第に自分も先輩たちのようにになりたいと思うようになりました。そして、先輩がここまで一生懸命になれる児研をすごいと思い、もっと積極的に参加したいと感じるようになりました。また、このキャラバンを通してあまり話したことがなかった人と話したり、今まで知らなかった一面を見たりして、様々な学年の人と仲良くなることができました。特に同学の人とたくさん話せたのは良かったです。キャラバンを終え、帰るときには私の中になんとなくあった壁のようなものがなくなり、児研員としての意識が芽生えた気がしました。その意識がこのキャラバンの一番大きな収穫だったと思います。

最後になりますが、この素晴らしいキャラバンを作ってくださった先輩方にお礼を言いたいと思います。このキャラバンで子どもとの交流、みんな準備してきた企画の成功など多くのことを得ることができました。児研員としての意識が芽生え、みんなと仲良くなれたキャラバン。私は本当に参加して良かったと思います。ときには参加者をまとめ、ときには影から参加

者を支えてくださった先輩方に感謝しています。ありがとうございました。



浅貝子ども会パート

「浅貝子ども会活動報告」

2003年度浅貝チーフ 早水 慎一

朝早くから上野駅に集まり、高崎、水上と乗り継ぎ越後湯沢からバス。

片道五時間かけて子供会を開く山荘まで行く。なんでそんなに遠くまで行くのか？という質問をよく受け色々考えてみるけれど、色んな理由もあるけれど、結局のところ「子ども達が楽しみに待っていてくれるから。」ということ以上の理由が見つかからない。児研が浅貝で子ども会活動を始めてから約50年、そのことは変わらないだろう。

浅貝子ども会は毎月1回土日を利用して、浅貝地区の三国小学校に通う子どもを対象にワンダーフォーゲル部の三国山荘で行なわれている。昨年子ども会に来てくれたのは、毎月平均して12、3名で、三国小学校の約半数の子どもが来てくれたことになる。本当に低学年が中心で最高学年が三年生という月も何度があり、ほぼ全員が肩車世代、暴れたいお年頃というある意味過酷な年齢層だった。

子ども会は三月から十二月まで、三田祭のある十一月を除いて計九回。工作や、クイズ、ミニゲームなど、子どもの気持ち

になって、(なったつもりで?) 毎月子ども会の企画を考えていた。昨年はパート員の数が例年よりも少なめだったということもあり、チームごとばらばらになるオリエンテーリング系よりも、全体が見やすくバリエーションも付けやすい工作や、料理などの企画を増やしてみた。新しいタイプの企画も増え、子どもからの反応も良かったようだ。

毎年最大のイベントである八月のキャンプは、中心である低学年の子の多くが参加できなかったため、人数が集まらず中止することになった。精一杯準備した年に一回だけのキャンプ、それに昨年も一昨年に引き続き山荘をいつも貸して下さっているワンダーフォーゲル部の方とも合同で企画していたキャンプだったので本当に残念だった。

子どもにとってもう一つのビッグイベントである十二月のお泊り会。こちらは13名という予想以上の盛況ぶり、最高学年はなんと3年生。初めてのお泊りという子も多く不安もあったが、やはり浅貝の子どもはタフ。I氏のサンタの声で泣いた子がいたのも事実だが、夜は騒ぎまくり、企画のキーキ作りもその怪しいサンタのプレゼント企画もなんとか成功させることができた。一年を良い形で締めくくることができたと思う。

一年チーフをやらせてもらって、浅貝の子ども会の成功の秘訣は単純に、まずパート員がしっかり活動に参加することだと感じた。子ども会に参加していくうちに、特に仲の良い子が自然に出来る。パート員が参加するということは単に大人の人数が増えるという意味ではなく、そんな子どもとの信頼関係を築き大事にするという意味だ。お気に入りの大人の来るか、来ないかということが企画の内容よりも大事な子どももいる。特に、小さな子や、あまり子ども会に参加したことのない子などは知ってる大人が居るほうが安心できそうだ。そして、ミーティングへの積極的な参加ももちろん大事。参加者が増えれば新しいアイデアや、切り口が見えてくる、パート員同士の親睦も深まるだろう。

チーフを終えてもまだまだ浅貝子ども会に参加するつもりだ。子ども達と同様に僕達も子ども会が待ち遠しい。これからも子どもと一緒に子ども会を楽しみ、一緒に成長していきたい。

「癒し系」浅貝子ども会

浅貝・新橋・文化財・パート所属 浅会サブチーフ

法学部政治学科2年 鳩野将太

昨年度を振り返ってみると、浅貝子ども会に入ったことは素敵なことだった。

まず、子供たち。月に一回の活動のせい、毎回見ることに身体的にも精神的にも成長していくわけである。初めの頃は些細なことで泣いていた子がまったく泣かなくなっていく。そして、少しずつ子供たちの繰り放つパンチやキックが重くなっていき、洒落にならなくなっていくわけである。何はともあれ、見ていて、微笑ましい。まるで、自分に子供が出来たみたいない感じである。いや、弟や妹と言うべきなのだろうか。とにかく、一月もたてば、無性に会いたくなるわけである。一・二月と二月間、浅貝がなかった時は少し感傷に浸ってしまったりと…。子供たちは何気に私たちに元気というか活力というか、今の流行りで言うなら、「癒し」を与えてくれるのだ。子供たちに会うことで、嫌なこと、悩みなどを洗い流せると言ってもいいすぎではないだろう。そんな何かがあの子供たちにはある。もちろん、当初はその子供たちとも距離があっただろう。な

にせ、初対面だったのだから。しかしながら、ここは上級生のお蔭で、次第に子供たちも名前を覚えてくれ、なついてくれた。なぜか、毎回、そばにいる子供が違ふことはふれないでおう…。

次に、パート員。児研の活動の中で唯一、毎回、泊り込み、お酒を飲むパートである。後者はともかく、前者は一泊二日とはいえ、それこそ文字通り「同じ釜の飯を食う仲間」なわけである。風呂にも一緒に入るわけで…。それは、同学となら、たまには有り得ないこともないが、一年から四年までいれば、まるで家族のような感じである。なんやかんやでお酒が入ることと普段は出来ないような相談も出来たりするのもかもしれない。色々な話を夜には各々にしているわけで、気付けば、夜が明けかけていたりすることもあったり。その他にも、みんなで誕生日を祝ったり、浅貝の二十回や三十回の回数を祝ったりと…。一人暮らしをしている身としては、浅貝に来たときの家族に囲まれているような感じは心地よくて好きだ。ここでも、「癒される」わけである。

最後に、浅貝のメインである子ども会に関する事について触れておきたい。一番、心に残っていることは三月だったと思う。ある子がスキーの大会に出てから来たために、その子が着

いたときにちょうど、子ども会が終わってしまったことがあった。その子は泣いていた。その姿は多分、忘れないと思う。次の日も、その子はスキーの大会で来ることは出来ないようだったが、どうにかして、来たいみたいだった。話を聞いていて、この子にとって、子ども会がこんなにも大切にされていることは嬉しかった。四月に再び行ったときには、その子は冬場だけ東京の小学校から移ってきていただけだったようで、もういなかった。三月に「来月、またおいで。」と言ったことが忘れられない。

ちなみに、子ども会とは毎月、私たちパート員がミーティングを開き、話し合って、企画を決めて、行う。それが前述のように子供にとって楽しみなもの、心に残るものであったとするならば、私たちには嬉しい限りである。これから、そんな子供にとって大切なものとなる子ども会を目指していきたいものだ。

私たちが子供に「癒される」ように、私たちも子供を「癒して」あげられれば……。そう思う、今日この頃。

ある五月の雨の日に記す。





いくさばた子ども会パート

二〇〇三年度いくさばた子ども会活動報告

法学部政治学科四年 伊藤綾子

「パート員それぞれが、各々のスタンスで個人の活動を充実させること」

いくさばた子ども会で活動した人なら誰もが、「担当の子どもとどのように接していくか」という大きな問いにぶつかるのではないだろうか。

二〇〇三年度に行われた学園との合同反省会では、「学習ボランティア」という枠にこだわらず、「メンタルフレンド」として子どもの精神的な面にも積極的に関わって欲しいという要望が、一部の職員の方々から出されました。しかし、名称が「学習ボランティア」であれ「メンタルフレンド」であれ、どのようなスタンスで子どもと接していくことは、最終的にはパート員それぞれの経験を通して決まってくるものだと思います。

二〇〇三年度の活動では、高校合格や資格取得を目標として学習に力を注いだパート員や、学園の許可を頂き、活動時間を延長して学習に取り組んだパート員がいた一方で、子どもとの触れ合いを通して生活面・精神面から子供をサポートしていたパート員もいたようで、同じいくさばたパートのメンバーであ

っても、その活動スタンスは本当にそれぞれ異なったものでした。

最初に書きました「パート員それぞれが、各々のスタンスで個人の活動を充実させること」という言葉は、二〇〇三年度の最初のミーティングで配られたしおりに載っているコメントですが、これからいくさばた子ども会で活動していく皆さんには、子ども達と触れ合う中で、この言葉にあるように、子どもにとっても自分にとっても最適だと思えるスタンスをそれぞれに築いていって欲しいと思います。また、自分が築いたスタンス・考えを大切にして、個人の活動を充実させていって欲しいと思います。そして、そのようにして充実した活動をしていくことが、いくさばた子ども会全体の発展にもつながるのではないのでしょうか。どうか、子どもと過ごす時間を大切にして、学園での個人の活動を充実させていってください！！

続いて、簡単ではありますが、二〇〇三年度の活動内容及び変更点等を報告させていただきます。

二〇〇三年度のパート員は、一年生五人、二年生六人、三年生三人の合計十四名で、そのうち一名が小学生を、十一名が中学生を、二名が高校生を担当しました。また普段の活動に関しては、前年度同様、毎週土曜日の午後三時半に学園に伺い、途中夕飯を挟んで午後九時頃までお邪魔するスタイルが採られ

ました。

続いて、新たに取り組んだ点・変更点等は以下の通りです。

① H Pの新設

パート員どうしの活動状況の把握、会計処理の円滑化などを目的として、H P上で活動の出欠、食事の申告をする方法を新たに取り入れました。

② 「外食制度」の継続（二〇〇三年度は3 Bと2 Bで実施）

学園のスペースの都合で夕食を頂けないパート員が、夕食時に一時学園を離れ、外で食事をとりました。（会計から毎食五百円の補助費を支給）

③ たばさ企画ミーティングの回数を四回から五回に変更

「企画当日に慌てて準備することが多い」という前年度の反省から、準備のためのミーティングを一回増やしました。

続いて、普段の活動とは別に実施された企画等について報告させて頂きます。

☆ 春の子ども会企画 「犯人を探せ！」

ゲームをクリアするともらえるヒントをもとに、お菓子を盗んだ犯人を子ども達が推理していきました。

☆ 秋の子ども会企画 「芸術の秋」

ビーズ細工や手作り絵本、ゴムを利用した「動くオモチャ」など、こちらが用意した材料を使って子ども達がオモチャを作り、遊びました。

以上で、簡単ではありますが、二〇〇三年度のいくさばた子ども会活動報告とさせて頂きます。

そして最後にもう一言。現役のみなさん、子どもとの一つ一つの触れ合いを大切に、充実した活動を行ってくださーい！

いくさばたでの活動を通して

清崎葉子

私は昨年度、児童文化研究会の中のいくさばた子ども会に所属し、活動させて頂きました。今年度も、その活動を継続させて頂けることとなり、4月から昨年度の反省を活かしつつ、心新たに活動に臨んでいます。

昨年度の活動を今改めて振り返ると、それは非常に楽しく有意義であったと共に、反省の尽きない1年であったと言えます。私は、いくさばたでの活動を通じて多くの経験をし、多くの事を学びました。

昨年度の活動は、手探りの中から始まりました。いくさばた子ども会に入ろうと決め、担当が決まり、私は晴れていくさばたのパート員となったわけですが、それまで、お年を召された方々とは多くの場で交流させて頂いていましたが、初対面の子どもたちと（ボランティアという形で）触れ合うのは初めてで、最初の1ヶ月はとても緊張していたのを覚えています。

月日を経るにつれて、徐々に子供たちのほうが打ち解けてきてくれて、私もたくさんの子どもたちと遊んだり、お話をしたり・・・いくさばたでの週1回の活動の時間は想像以上に楽しい時間となりました。本当に、昨年の1年間、私はいくさばたで活動することが出来たということを、心からよかったと思っ

ています。

しかし、私自身の問題が見えたのも事実です。昨年の1年間、私は自分の力不足を常を感じ続けていました。いくさばた子ども会の活動場所である景德学園は、ある種特殊な環境です。その中であって、私は子供たちからもらったたくさんのもを、何一つ返すことが出来ませんでした。私は子供たちにとって、どう、あるべきか、何を返すことが出来るのだろうか・・・私は考え続けました。

今も、その答えは見つけることが出来ません。けれども、何度も行われてきた学園側と私たちパート員との話し合いの場で、私は「少なくとも努力次第で自分にも出来ることがある」と、そう思いました。今は何が出来るのか、具体的なものは何一つ見えませんが、それでもこの活動を悩み、考え、そして何より楽しみながら続けることで、私はいつかその答えを見つけることが出来るのではないか、いえ、必ず見つけて、私に多くの大切なものをくれた学園の子どもたちに何らかの恩返しをしたいと思います。

今年度は、私にとっていくさばたパート2年目の年です。昨年度の経験・反省を無にすることのないよう、昨年度の私をフルに活用して、今年度の終わりにはさらに成長した自分でありたいと思います。

2年目を迎えた活動は昨年度とは違った問題や悩みを抱え

るかもしれませんが。しかし同時に、昨年度以上の楽しみもそこには存在するのだと、私は確信しています。

最後になりましたが、私が昨年度1年間の活動続けることができたのは、学園の子どもたち、職員の先生方、そして同じいくさばたパートの先輩方・同学の方々の支えがあったからだと思います。それらの支えて下さった方々に心から感謝すると共に、いくさばたでこうした人の輪を改めて実感出来るということは、本当に素敵なことだと思います。それを思うと同時に、そうした人の輪というものはすでにご卒業された多くの諸先輩方が長い年月をかけて築き、それを代々受け継いできた結果だと思っています。こうした多くの先輩方の跡を自分も辿ることができることは、いくさばたの（活動とはまた違った）魅力なのではないかと、私は今そう思います。





新橋子ども会。パート

新橋企画をめぐる思い出

二〇〇三年度チーフ 佐野 匡

こんにちは。昨年一年間、新橋子ども会のチーフを務めさせて頂きました、佐野という者です。私はチーフ就任以来常々「雨男チーフ」と呼ばれていましたが、実際その通りでして、調べてみますと五回に一回は雨で活動が中止になっていた事が判明しました。先代の井上チーフやその前の神戸チーフの時は圧倒的に晴れが多かった気がしますし、現在の高村チーフも今のところ相当な晴れ男ぶりを発揮しています。従って私の代はいわば谷間の時代にあたるわけですが、サッカーで「谷間の世代」と呼ばれたU-18日本代表が湧らつとしたプレーで多くのファンを楽しませてくれたように、二〇〇三年の新橋子ども会もまた、紆余曲折はありましたが、全体として楽しく一年間の活動を終える事ができました。というわけで、無理のあるこじつけはこれくらいにしまして、以下のスペースでその一年間を振り返ってみたいと思います。

私がチーフになった時、新橋員の間で一つ話題になった事がありました。それは、新橋の活動はなんだか毎週同じような事をしていてようでマンネリ化を感じる事がある、だからたばさ企画みたいに新橋も何かイベント的なものをやってみたら面白いのではないか・・・そういうものでした。私は正直悩みま

した。もちろん新橋の活動は、来てくれる子どもの顔ぶれや人数が週により違ったりしますし、遊びの内容もその週の状況によってバリエーションがありますので、必ずしも同じ事の繰り返しとは言いきれない面があります。しかし、大きくみれば新橋にたばさ企画のようなアクセントがない事は事実ですし、私自身マンネリ化を感じた時期があり、チーフ選挙の際に「マンネリ化を何とかしたい」と述べた経緯がありました。ところが、いざ「新橋企画」なるものの実現をイメージしてみた時、私は立ち止まってしまったのです。

実は二月初めの活動で、私は井上前チーフらと共謀して、前チーフに鬼のお面をつけてもらい、突発的に豆まき企画というものを行いました。本格的な「新橋企画」に先立つ、ある意味実験的な試みでした。そして私はこの日、「新橋企画」を行う事の意味を再考せざるを得なくなりました。豆まき企画の反省点として、メンバーへの十分な相談なしに私が単独行動気味に準備をしてしまった事や、校庭に大量の豆をばらまいてしまったために片付けがとてつもなく大変だった事があります。しかし、それならば次回はこの教訓を生かして、新橋員みんなで本格的に企画を練ればよいという事になります。実を言うと、私の考えが揺れ動いた原因は別のところにありました。それは、こういう事です。豆まき企画をスタートさせた数分後に、いつも野球やサッカーと一緒に遊んでいる男の子が校庭にやって

きたのですが、「一緒に豆まきやらない？」と声をかけると、「やだよ。サッカーがしたくて来たのに」という答えが返ってきたのです。彼にしてみれば、普段なら自分たちの好きな事をして遊べる校庭がこの日に限って大人の気まぐれで押し付けがましい豆まき大会の場になっていた、その事が納得いかなかったわけです。この日彼が見せた仏頂面を、私は忘れる事ができません。校庭開放という場で、子どもたちに対して私たちはどのように関わるべきなのかを改めて考えさせられた出来事でした。

さて、私の至らなかつた点は、いま述べたような事をメンバーに率直に伝え、議論を喚起する機会を逸してしまつたところにあります。なぜそうなつてしまつたのかはよく思い出せないのですが、先の出来事の影響で、よほどテンションが下がつてしまつていたのでしょう。冷静に考えれば、新橋の活動意義を全体で見つめなおす良いチャンスでしたし、先の出来事をもつて校庭での企画は難しいと即座に決めつけられるものでもないでしょうから……。ところで、これまでの文章だとまるでこの年の活動は真つ暗であつたかのような印象をみなさんに与えてしまうかも知れませんが、活動自体は、本当に楽しいものでした。小枝をたくさん拾つてきて「これ、ティラノサウルスの骨」と言つて嬉しそうに見せてくれる子とか、「ビクトリア」と叫びながら無邪気にサッカーボールを蹴っている

子（何でベツカムじゃなくてビクトリアなんでしょうね・笑）など、子どもたちの世界の面白さを一つ一つ書き出していったらきりがありません。こうした子ども会の風景はこれからずっと続いていくのだらうなあとと思いますし、続いていってほしいと思います。

話は戻りますが、新橋企画の方は後期に入つて新たな展開を迎えました。三田祭委員長のなつしーが、三田祭に新橋の子どもを招待しようと提案し、中心となつて動いてくれたのです。新橋の子どもの三田祭への招待は、記録を見ると十年くらい前の桜田小時代に実施されていた形跡がありますが、最近行つていませんでした。招待に先立つて港区教育委員会と御成門小学校に企画の趣旨を説明した文書をお送りしたところ、快くゴ－サインを出して頂きました。三田祭当日は六人の子どもにも来てもらい、影絵劇を見てもらつたり、遊び企画に参加してもらつたりしました。

新橋企画の件に象徴されていますが、二〇〇三年の新橋子ども会は、チーフがぼんやりしていた分、各メンバーが自分なりの役割を見つけて自主的に動いてくれ、結果として偶然うまくいってくれたのではないかと感じています。そんな仲間たちと過ごせた事が、私の財産です。最後になりますが、新橋子ども会のメンバーたちと子どもたちの笑顔に感謝しつつ、新橋子ども会がこれからも魅力的な場所であり続けてくれる事を願ひ

まして、この文章の結びとしたいと思います。

新橋活動の感想

新橋。パート二年 佐藤崇文

はじめに僕は文章において「臨場感」を大切にしたいと思っています。なぜなら文章は誰か読む人がいて初めて「文章」になり得ると思うからです。この文体は僕自身の読者を常に念頭におきたいという気持ちの表れだと思ってください。

この記述をすることによって僕自身も改めて新橋活動について考えてみます。

まず、新橋活動の特徴を考えてみよう。おそらく児研の中で身近な子供と触れ合う機会が一番多いのは新橋活動だと思う。次に、新橋活動がある理由について考えてみよう。基本的には子供と一緒に遊ぶこと、それもオフィスビルの立ち並び誰もが想像するような土の校庭を持たない学校に通う子供たちと触れ合う・遊ぶというのが理由だと思う。でもここで少し疑問が出てきた。もしかして、この新橋活動はどのような環境にいる子供達がみな往々にして外で遊ぶことを知らずに、ゲーム機器などが創り出すバーチャルな世界を楽しんでいるだろうという偏見のもとに、そんな彼らと遊ぶ・触れ合うということをしているのだろうか。何か違う気がする……。なぜならそんな偏見を持って活動に望んでいる人を見たことがないし、子供たちも

やっぱり僕らが楽しんできたようなことを変わらずに楽しんでいる子ばかりだからだ。じゃあ何のために僕らは一緒に子供と遊んでいるのか、この活動をしているのか。彼らと触れ合うことで昔遊んだ自分の子供時代を懐かしんでいるのだろうか。これまた何か違う気がする……。懐かしむ気持ちで活動をするなら大学生が裸足で校庭を走るのかなあ。一輪車が乗れなくてマジで悔しがったりするのかなあ。多分答えは人それぞれだけど僕自身が思うのは、きっと僕たち自身も結局のところ楽しんでしまっているんじゃないかと思う。大学生になっても「楽しい」と思う気持ちの本質的な部分は子供の頃と変わっていないんじゃないかなと思う。いつになっても天気の良い日には外に出て目一杯さわやかな汗をかきたいもんだろう。うーん、今こう論理的に活動を検証しながら記述してて感じることは、新橋活動に対してこんなことする必要は全くないなあってこと。子供と一緒に遊ぶことにきちんとした理由なんかない。それぞれがそれぞれの思いで活動に参加し、結果的に新橋活動という集合体として括られているというだけだ。でも、僕自身は新橋活動が俗にいうボランティア活動だとは決して思わない。ボランティアは自分が何のためにやっているのかなんて考えるものではないし、考えている時点でそれはすでに自発ではなくなっていると思うからだ。僕自身は新橋活動それ自体を楽しみながらも、結果的にその活動を通して自分自身のことを考える機会が

増えている気がする。しかもさっきも言ったようにそれが無意識にできている気がする、そんな活動だと思う。新橋には色々な面白い人(先輩・OB)が多いからなんだろう。ふう、最後まで読んだ人は全然分らないかもしれないけど、それで全然いいや。結局のところ新橋活動は各々が各々の気持ちでしている活動の集合体にすぎないし。何か文体が馴れ馴れしい口語体になってきたからこころで止めておきます。



童話会パート

童話会の一年を振り返って

2003年度童話会チーフ 岡本真由子

2003年度の童話会は、パート員数が20人を超え、毎回15人以上のパート員が活動に参加してくれました。

この大所帯のチーフを任されることになり、私がチーフ選挙の際に掲げた公約は、「パート員全員が楽しく活動できるパートにする」でした。

自由な雰囲気の中で自分の好きなようにストーリーを作り上げ、それに対するみんなの感想を聞いたり、自分とはまったく異なる発想の作品に触れる。そんな童話会の活動は純粋に楽しいものです。与えられたテーマは同じでも出来上がった作品はすべて十人十色。どれがよいと選ぶのではなくて、各人の作品をすべてひとつのお話として受けとめることで自らの発想をより柔軟なものにできるのだと思います。だからこそ、童話会のチーフになった私は「パート員の個性を大切にすること」に重きを置いて活動を行っていたと思います。ただ個人を重視しすぎたために、まとまりに欠けた部分もあったかもしれません。その点で他パートの方から心配されたこともありました。もっとサークルとして活動に対して強制力を持たせるべきか悩むこともありましたが、結果的にパート員みんなが積極的に活動に参加してくれたので、助かりました。

ただひとつ心残りだったのは、これまで何年か続けてきた「読み聞かせ」という企画を、2003年度は廃止して行わなかったという点です。読み聞かせとは、近くの小学校へ赴き、自分たちの作った紙芝居を子供たちに見てもらったり、子供たちと一緒に本を読んだりする企画で、童話会員にとって実際に子供たちと触れ合う数少ない機会でした。しかしあまり慣れないがために子供たちとと思ったように打ち解けられなかったり、普段の週一回の活動で準備を行わなければならないために練習不足で本番を迎えてしまったりと、課題がいくつかありました。また読み聞かせの準備のために、普段の活動である即興作文の機会が減ってしまうことも問題でした。そこで私は、思い切って読み聞かせを行わないことにして、即興作文や合評会によって文章を書くことを重視した活動を行っていくことに決めました。この件については賛否両論であり、先輩方から続けていくべきなのでは、という意見をいただくこともありました。もともと童話会というのは、読み聞かせ（ストーリーテリング）が活動の主体であり、作品を書くということは行っていないかったと伺っています。児研の中でも80代も続くことも歴史のある童話会だからこそ、先輩方にとって読み聞かせは守っていてもいいものだったのかもしれないかもしれません。また私自身、2003年度の間に小学校や教育委員会の方から読

み聞かせの依頼をいくつかいただき、子供たちの本離れが進む現在、改めて読み聞かせに対する期待が高まってきていると感じることもありました。

童話を創ることと伝えること。活動形態がまったく異なってしまうために、その二つの両立は難しいと思います。ただ、2003年度に私が読み聞かせを廃止したことで、童話会は読み聞かせを行わないものだという伝統を作ってもらいたくはありません。どちらに重きをおいて活動を行っていくかということは各年度のチーフを主としたパート員の判断にあくまでゆだねられるようにしていったらいいと思います。私自身、2003年度に読み聞かせを行うべきであったとは思いますが、童話会の児研離れが叫ばれていることを考えると、一概に現在の状況をよいとは言えないのかもしれませんが、今後も童話会の活動内容について考える機会は何度もあると思います。そのときに、選択肢の一つとして読み聞かせを残していったほうがいいと思います。

最後に、忙しい中活動に何度も参加していただいた先輩方と、童話会の活動を創りあげてくれたパート員に感謝します。力不足ながらも一年間チーフをやったのは、みなさんのおかげです。そして今年度チーフの町永さんをはじめ、こ

れから童話会で活動していくみなさんに、心からエールを送りたいと思います。

〈2003年度 童話会活動概要〉

・ 前期活動・・・即興作文（毎週）

合評会（毎月）

・ 夏休み・・・童話会合宿

合評会（童話の森用作品）

紙芝居作品選出&たたき

・ 後期活動・・・三田祭準備

紙芝居「月の夜の魔法」制作

童話の森製本

私の目に映った童話会（2003年度の活動を通して）

二年 福元 彰朗

思い出というものが、なんとも尊いものに感じられます。もしも私が誰一人として人間に出会うことなく、話すことも知らず、聞くことも知らず、読むことも書くことも、言葉すらも知らずに今まで生きてきたとしたら、私には思い出など何一つとして残っていないことでしょう。私は、幼い頃に貰うことができた一生忘れないであろう大切な思い出を私に授けてくれた大人たちへの恩を返すべく、今度は自分が、子供に対して何かを与えられはしないかと意気込んで童話会の門を叩きました。四月の終わりの頃でした。

しかしながら、理想の割りに実力が伴っていないという状況から歩みを進めなければならないというのが素人の宿命なのでしょう。いきなり上手に子供向けの話を書けるというものでもありません。私は普段の活動の中で、少なからず歯痒さを感じつつも、しかし、それでいて楽しく文章を書き続けて今に至っています。当然私一人で活動を行っているわけではありません。童話会には様々な人がいて、童話会は多様な側面を持っています。ですが今回は、昨年一年間に私の目に映った童話会の姿を紹介させていただくことにします。

私が最初に活動に参加したときの様子は、あまり詳しくは覚えてはいませんが、とりあえず即興作文をしていたと思います。担当者が用意した「お題」に基づいて、とにかく童話らしく仕上げようとしていたのですが、相当に不自然さが漂っていた気がします。即興作文は、文章を書く練習ということで、必ず童話を書かなければいけないという決まりごとはありません。いつも作品を書き終わってから全員の文章を回し読みして感想を書き込んでいきます。初めてのときは、自分の書いたものにいったいどんな感想が書き込まれているのかと、文章が手元に帰ってくるまでどきどきしたものでした。

春学期のもうひとつの主な活動として、合評会がありました。これは各自で予め作品を作ってきて、それに対して全員で感想を言い合ったり、批評を行ったりするものです。私は未だに心から納得のいく作品が書き上げられずにいます。合評会のある度にまだまだ精進が必要だと感じている気がします。春学期の活動はとても長かったような気がしましたが、実は私は正味ふた月ほどしか活動に参加しておりません。それだけ、一つ一つのことが印象深かったのだと思います。

夏休みには、一泊で合宿へ行きました。秋の主な活動となる、童話の森という作品集の製作についての話し合いと、三田祭で行う紙芝居についての話し合いが主な目的でしたが、海辺で花

火をしたことが最も印象に残っています。

秋学期に入ると、早速童話の森に寄せる原稿と紙芝居の製作が本格化しました。私は、童話の森の編集にはまったく関わらず、紙芝居の絵を描く役割になりました。この年の紙芝居の絵は、原画を担当した人間が、複数人いたので、場面ごとの登場人物や背景の様子はまったく統制の取れていない状態のものが仕上がりました。私はそれでも面白いのではないかと思っていたのですが、三田祭の当日に紙芝居を見せたときに、戸惑っている子供の様子を見たときにその考えを改めて、深く反省しました。一方で、私が感知していなかった、童話の森の製作も順調に進んでおりました。私は、何の役にも立てませんでした。が、なかなか立派な表紙のものが出来上がっていました。

三田祭が終わってしまうと、もう後は冬休みなり、テストなりで、いろいろと時間を奪われて特に童話会の活動として大きなことはありませんでしたが、数回ほど春学期と同じように、即興作文などを行っていました。三田祭の忙しさからの反動か、この何気なく文章を綴るだけのことが、家へ帰るかのような感覚を私に与えました。いま思い返してみると、とても居心地のよい一年間を童話会で過ごさせてもらったような気がします。





文化財パート

「文化財活動報告」

二〇〇三年度チーフ

甲斐梨緒

二〇〇三年度の文化財パートは、人形劇と影絵劇の公演を十カ所、計十九公演行い、その全てを無事成功させることができました。日ごろ応援してくださっている皆さんに感謝の気持ちを込めて、この一年間の活動を報告させていただきます。

・ 前期活動

昨年度は新メンバーに爽やかな五人を迎え、総勢十六名で活動をスタートさせました。四月に新入生のための体験活動を実施し、五月から夏休み中にかけて夏キャラバン公演の練習・準備に取り組みました。

夏キャラバン公演作品は人形劇「夏の風」(演出・西川和)、影絵劇「あした天気になあれ」(演出・稲嶺清志郎)で、どちらも演出家オリジナルの展開や劇効果に工夫を凝らした、夏らしい作品に仕上がりました。

☆ 夏キャラバン公演 ☆

九月初旬に、埼玉県比企郡幾川村で行いました。村内の小学校二校、幼稚園・公民館一カ所ずつで、四ヶ所計六公演行い

ました。

どの公演も思い出深い、一公演一公演が充実したキャラバンでした。小学校での児童と一緒に給食と昼休みの時間や、幼稚園での劇の登場人物にかわいらしい声援を送る園児達の姿。公民館公演の宣伝のために、村の広報カーを使わせていただいたことも印象的です。ウグイス嬢よろしく「都幾川村のみなさんへ。これから影絵劇が始まります」と村の中をアナウンスして回ったことは…、忘れられません。

村内の小学校数が少ない中で多くの子供達に劇を見ていただくために、幼稚園と公民館で公演することを提案したのですが、実現までには様々な苦労がありました。村の教育委員会の方や先生方が、私達の活動を温かく受け入れ、応援してくださっていたことが何よりもの支えであったと思います。

・ 後期活動

夏休み明けから、夏キャラバン作品をベースとした三田祭・児童館公演のための劇作りに取り掛かりました。人形劇は『まことのやくそく』(『夏の風』改題、演出・服部さくら)、影絵劇は『あした天気になあれ』(演出・小川未樹)。また十二月には、有志で通常より小さな舞台(小舞)を使つての作品を制作・上演しました。

☆ 三田祭公演 ☆

十一月末の三田祭中に、各劇を一日一公演ずつ、四日間で八公演行いました。児童館や幼稚園の子供達、OBOGの皆様など、幅広い層のお客様に足を運んでいただき、夏とはまた違った味付けの劇を楽しんでいただけだと思います。

たばさ公演とともに、三田祭公演は文化財が児研のパートとして活動している、ということ強く実感できた公演でした。三田祭という一大イベントに参加できたこと、それを通して多くの方に感想や叱咤激励をいただいたこと、児研員同士の交流ができたことを嬉しく思います。このような機会を提供してくれた三田祭委員長をはじめ、教室に足を運び劇に関わってくくださった皆さん、本当にありがとうございました。

☆ 児童館公演 (矢上小・いくさばた公演) ☆

十二月の日曜日を利用して、横浜市立矢上小学校で影絵劇、いくさばた・パートの活動先である品川景徳学園で人形劇を公演しました。

矢上小学校では矢上小市民図書室の方と共催で、建て替えられた新校舎で公演しました。品川景徳学園での公演は昨年度で四度目。いくさばた・パートの方には打ち合わせや当日準備など、大変お世話になりました。協力していただいた皆さんに御礼申

しあげます。

☆ 小舞公演 (尾山台小・たまごの会公演) ☆

十二月末に公演した小舞作品は『ふかいもりの二人はなかよし』(演出・宮崎美里)で、ミュージカル風のにぎやかな劇となりました。

午前に世田谷区立尾山台小学校けやき学級で、午後には目黒区中目黒スクエアでたまごの会公演と、一日に二カ所回って公演しました。両公演とも公演前後に子供達のレクリエーションの時間をとっていただき、子供と交わる機会を多く持った貴重な公演となりました。

・活動を終えて

最終公演から半年近くたつ今でも、この一年間のことは昨日のこのように思いだされます。どの公演を思い出しても、子供たちとパート員の笑顔が浮かび、楽しい気持ちで胸がいっぱいになります。

同時に公演を終えるまでの、不安との戦いであった日々も思い出されます。○三年度は開始時から公演交渉に加え、機材が大幅に故障したり練習場が工事することになったりと問題が続き、「公演ができないかもしれない」と私はいつも頭を抱え

ていました（今から考えると大げさであったと思いますが、その時は真剣でした）。

しかし、そんなアクシデントにもめげず、良い結果を出せたのは年間を通したパート員のがんばりがあったからです。パート員は一人一人強い意志をもって活動に臨んでいて、ピンチのときほど（？）まとまりがよかったです。

それぞれの得意分野を活かしアイデアを出し、試してはさらに考え推敲する…、それが昨年度の劇制作でした。常に試行錯誤、時間との戦いではありましたが、真剣に良い劇を作ろうとがんばる彼らをチーフとして陰から支えられることを嬉しく思っていました。

昨年度は「試す」ということで活動の幅を広げられた一年でありました。夏キャラバンを変則的な形で行い、小舞公演先も新たに広げることができました。そして公演する先々で文化財のような劇活動が求められていることを強く感じました。これからも柔軟性を持って活動することで、もっともっと多くの舞台で活躍できるはずだと思います。

同時に、「伝統」の大切さを感じた年でもありました。三田祭や児童館公演でピーターの子供達に会うとき、文化財に残

されている道具や人形、脚本から昔の活動を知るとき、あるいはOB・OGの方に直接お話を伺うとき…今も昔も変わらず、文化財は「子供達に楽しい劇を見せたい」という情熱を抱いているのだと感じました。そして、その伝統を引き継いで、活動ができるということを誇りに思いました。

「子供達のための劇」、それは年度の区切りなく、文化財の目指す永遠の目標です。今、昨年度の活動で一回り大きくなったパート員達が新たな公演に向けて日々努力しています。OB・OGの皆様には、日ごろの応援に心から感謝申し上げますとともに、〇四年度、〇五年度…とこれからのび続けていく、文化財の活動も見守ってくださいようお願い申し上げます。

「文化財の話」

田村 敦

去年の文化財活動は、僕にとって実りのあるものでしたよ。文化財活動の中で、一番楽しく、そして印象に残っているのは、やはりなんといっても、文化財活動のメインの活動である小舞公演でした。なんといえますか、普段の活動よりも気楽というか自由？みたいな・・・

そんな中でもみんな製作や練習に真剣に取り組んで、和気藹々とね。あの少人数な感じが僕にはピッタリでしたね。やっぱり演出家が良かったのかな？演出家は凡人にはわからないセンスと意思をお持ちで・・・。解しがたい所もありましたけど、それでも練習も楽しかったし、劇自体もおもしろかったです。公演当日は二公演で、二公演目のたまごの会ではクリスマス会に参加させて頂いて、子供たちと触れ合ったり、ケーキ的なものを頂いたり、いい思い出ができました。やはり文化財はもっと小舞を押ししていくべきではないかと一人で思っています。

もちろん夏キャラバンも楽しかったですよ。ええ。僕が思うに、夏キャラバンは二回目くらいから楽しさがわかってくるの

ではないかなと思いますね。やはり一年生で最初のキャラバンは、すべてが初めてであつという間でしたからね。でも、今年は僕は上級生であるからにして、その一年生にキャラバンの楽しさを伝えなくてはならないので結構あれですよ。でも自分が楽しんでりや伝わるんじゃないかな？てな感じで

秋もね、良かったんじゃないですか？それなりに・・・ただあれはどうなんでしょうかね、僕としては、やはり小舞一本にかけようよみたいな。

一年間の文化財を通して、僕自身結構人間的にも成長したのではないかなあ、とは思っています。どう、なんだろうかね？それはいいとして、いろいろな個性を持った人達と触れ合え、たし、仲間というんですか？同志い？がね、こうね、見つけれね、ホント良かった、です。いいとこだよ、文化財は。うん、ほんとにね。アリガト。



卒業生寄稿文・紹介文

2003年度卒業生

【浅貝】

土田・坂井

【いくさばた】

土屋・太刀川・松田

【新橋】

井上・及川・尾崎・小田・土屋・徳留・

浜崎

【童話会】

萩原・佐藤・福田・高橋・入江・村松

【文化財】

竹澤・坂・山野辺

井上尚人

商学部

【パート】新橋、浅貝、文化財

(株)日本経済新聞社

皆さん、ご無沙汰しております。四月から新聞社で働いております。想像していた以上に仕事は忙しく、なかなか自分の時間がとれないのが現状です。大学一年の時に兎研の活動で味わった、新鮮で素朴な気持ちをいつまでも忘れたくないなと最近よく思います。「可能性は無限大」を信念に日々生きてますが、これはチャンスが伴ってこそ現実化されるものです。

チャンスを逃さず、一つ一つの経験を大切に、何事にも最大限チャレンジできるようなバイタリティにあふれた社会人にな

れたら良いなと思います。これからもお互い精一杯頑張りますよう。

(現役より)

井上さんの紹介

種族：大型肉食

生息地：浅貝

兎研名：將軍

性質：実はとっても優しくて気を遣うおじちゃん

成長度合：気持ちは若者

得意技：スピード違反

特記事項：見た目に反してアルコールには強くない。

攻撃するならビールを飲ませた後で。

入江慶太

理工学部

【パート】新橋・童話会

慶應大学院

『振り返ればジケンがいた』といった感じで、大学生活が過ぎていった気がします。本当、四年間はあつという間で、一歩間違えればドラマみたいに刺し違うような生活をジケンでしてきた気もする。ようやく卒業してジケンから開放されたと思いました。長いですが、長いですが、いかにジケン臭がないと物足りない

気がし、卒業しても顔をよく出したり…。とりあえず言いたい事は、『ジケン、ボンバーイエイ!』という事です。

(現役より)

いりーさんの紹介

よくしゃべる、元氣のかたまりのような方。いつも笑っているイメージ。紙芝居の絵にだめだしをくらおうが、その笑顔はすてきです。

尾崎奈穂

文学部 人文社会学科英米文学専攻 【パート】新橋

四年前どんなサークルに入ろうかと真剣に悩んでいた私が、あつという間にこうしてOG1年目を迎えてしまいました。三田祭や合宿等に参加させてもらいましたが、やはり私にとって居心地の良かった場所は、日々の活動場所であった「新橋」だと今でも思います。私の人生に大きく影響をもたらし、私を大きく変えてくれたであろう児研に感謝しています。たくさん先輩、後輩そしてもちろん同学と巡り会えたこと、これからも大切にしていきます。後輩には、児研に誇りを持ち、日々の活動を楽しんでいただきたいと思います。

(現役より)

いなほさんの紹介

四年間日向日陰となく井上チーフを支え続けた、新橋の影の

ミョともいえる先輩です。新橋では女の子たちの優しいお姉さんの存在であったため、引退した今でも「奈穂はもう来ないの？」と残念がられているほどです。現在はオーストラリアに行っているとのこと、お土産話に期待しています。

小田哲平

理工学部 【パート】新橋

慶應義塾大学院

僕は、一年の秋から新橋に入りました。新橋は、子供たちと遊びを通して間近で触れ合えます。「校庭を開放し子供たちが怪我をしないよう見守る」ことが活動の趣旨でしたが、いつの間にか本気で遊んでいたりもしました。今思えば、児研に入った当初は、頼りない自分ではありましたが、活動が続けるうちに少しは成長できたかなと思います。現児研員の方々が各パートの活動を通して成長していつてもらえたら幸いです。

(現役より)

うてっぴーさんの紹介

柔道黒帯にして、バイクの中免を持つナイスガイ。なのですが、そんな言葉からは想像もできないほど穏やかで優しい先輩です。その強靱な肉体から放たれた本気のシュートは、子供たちに驚きを与えていました。しばらくお会いしていませんが、今度の中免を取るコツを聞きたいものです。

及川剛

経済学部 【パート】新橋

国際協力銀行

この春に卒業して児童文化研究会のウエイトがいかに大きかったか思い知らされる日々を送っています。三田で起こった出来事は活動やルームという空間で共有でき、悩みなども友人との会話を通して解消してたのでしょうか。いまは場所こそ失えど、児研で培った仲間とともに色んな場面で助け合いながら社会に望んでいきたいと思っています。

（現役より）

く及川さんの紹介く

非凡な知識と才能で、後輩たちのよき師であった先輩です。話題も豊富で、人を飽きさせることのない人でした。新橋での活動中も常に笑顔を絶やすことなく、そのおらかな人柄は子供たちにも慕われていました。またいつか、おすすめの映画のお話などを熱く語ってほしいものです。

坂慎弥

理工学部物理学科 【パート】文化財

慶應義塾大学院

児研生活の四年間は、自分にとって大きな成長の場であり、色とりどりの児研色に染まることができました。この成長はけ

っして自分ひとりだけではなく、諸先輩方・同学後輩のみんな、そして活動で出会った沢山の子ども達によるものです。そんな児研色を武器に、これから始まる新世界を色鮮やかなものにしていこうと思います。

（現役より）

く坂さんの紹介く

夢想家であり現実家。独自のワールドを繰り広げる。電子機械に強い。静岡まで髪を切りに行くだけあって髪にこだわりがある模様。わかんないことがあればとことん教えてくれる優しく熱い先輩。常に自分を客観的にみれて逆境に強そう。とかく児研思い。

「児研の表から裏まで教えてもらいました。ありがとうございます。」
います☆これからもワールドを広げていてくださいね！」

64

坂井由美子

文学部人文社会学科 図書館・情報学専攻

【パート】浅貝・新橋

児研を通して出会ったすべての人、先輩・後輩・同輩、そして子どもたち、みんなからかけがえない気持ちをももらいました。どれも幸せな出会いばかりだったと思います。本当にどうもありがとうございました。

（現役より）

くゆみこさんの紹介

種族：中型草食（ただしベジタリアンではない）

生息地：浅貝

児研名：ゆみプー

性質：心の優しいおっとりお姉さん

成長度合：気持ちも若者（？）

得意技：天然

特記事項：時々聞き流されるおそれあり

本当に伝えたいことは耳元で叫べ

佐藤真代

法学部 政治学科 【パート】 童話会

中央大学法科大学院

童話会、夏合宿、三田祭：児研の活動はどれも楽しくて、素敵な思い出をたくさん作ることができました。四天王を世話してくれた同学やパートのみんなには本当に感謝しています。ありがとうございます！これからもよろしくお願いします。

（現役より）

くまさよさんの紹介

なんといってもおしゃれ、華やかという言葉がよく似合います。話しやすさも兼ね備え、あこがれのお姉さんの存在です。

高橋志奈子

文学部東洋史学専攻 【パート】 童話会

児研には四年間お世話になりました。今後もこのサークルの益々の発展を陰ながらお祈りしています。いままでどうもありがとうございます。

（現役より）

く志奈子さんの紹介

落ち着いた話し方をするこの方は、童話会での作品のせいか不思議感漂うところも。

素でもお酒が入ってもやっぱりすてきな方です。

竹澤洋子

理工学部 【パート】 文化財

慶應義塾大学院

大学四年間、児研の活動を通じてたくさん楽しい思い出を作ることができました。ありがとうございます。これからの児研の活躍を期待しています。現役のみなさん、がんばってください。

（現役より）

くようこさんの紹介

文化財チーフとしても発揮された「仕事の的確さ」と、車の運転（証言アリ）や活動中の発声等の「ダイナミックさ」が、洋

子さんを形成する二大要素と思われます。でもどちらかと言えば、ココロは乙女。

「公演が終わって打ち上げでの、洋子さんの笑顔と笑い声（そして生ビール）を忘れません☆文化財これから私たちの手で盛り上げていくので、見守っててくださいー！」

太刀川真理

文学部 【パート】 いくさばた子ども会

慶應義塾大学院

児研では大学時代の貴重な友人、思い出をつくることができました。特にいくさばた子ども会の活動を続けられたのは、活動におけるさまざまな悩みや楽しさを共有して下さった、たばさの皆さまのおかげです。心よりお礼申し上げます。

（現役たばさいんより）

くたっちーさんの紹介く

・いつもほんわかった笑顔で私たちとたばさっ子を見守っていてくれました☆。たっちーさんの笑顔を見ると、こちらも幸せな気分になってとっても癒しでした。

・太刀川先輩は一言で申し上げるととてももの静かな方でした。お忙しい方で、ほとんど活動を一緒にすることは出来ませんでした。が、いつも学園の子（特に女の子たち）に親しまれていて、憧れの的でした。個人的には、私は太刀川先輩の担当の子を引

き継いで、担当となったので、その子やそのまわりの子からたくさん賞賛の声とか、本当に好きなんだなあと知られる発言をたくさん耳にしました。それもあって、とても先輩を尊敬しています。私も先輩のような人を目標にしたいと思います！

土屋さんが殿下なら、この方は姫でしょう。

落ち着いたたずまいに心洗われた人々が多いでしょう。

・笑顔が魅力的でしっかりした人でした

辻川衆宏

理工学部 【パート】 いくさばた子ども会

三重大学医学部

児研のみなさん、おひさしぶり！はじめまして？それぞれの道で元気にしていることと思います。僕は、いくさばたに3年間所属させてもらいました。子どもたちは相変わらず元気なんだろうなあ。いつの時代も子どもたちは希望だと思っています。そんな子どもたちと関わり合えたことに感謝しています。

（現役より）

く辻川さんの紹介く

・みんなに慕われていて頼りになるお兄さん。文化祭でお忙しい中、たばさ旅行に来てくださった時は感動しました。全員おそろいでいただいた詩はいつも手帳に書いて持ち歩いてま

す！

・辻川先輩は、たったの一度しかお会いすることが出来ませんでした。他大学に行かれて勉強されていらつしやるということで、その機会は本当に貴重な機会でした。その一度の印象から申し上げると、辻川先輩は、本当にかっこいい先輩でした。夢を持ち、目標に向かって絶えず努力されているお姿を拝見させて頂いていると、私は、自分はまだ何もしていないのだと思いました。同時に、これからまだ頑張ることが出来るのだとも思いました。色々なことを、そのお姿から学ばせて頂ける、そんな素敵な先輩でした。

・いわずと知れた児研のカリスマ。あの笑顔に逆らえる人はそうそういないのでは？

・たばさのアニキ的存在。頼りになる先輩でした

土田隆仁

理工学部 応用化学科

【パート】 浅貝(チーフ)・文化財

NTT 東日本

現役時代、文化財での活動や浅貝チーフの職務を全うしていくにあたり、本当に多くの諸先輩方に支えて頂きました。その感謝に応える為にも、これからは、OBの一人として、現役の活動を支えていけるよう努力したいと思います。

最後に諸先輩方、今まで私どもを支えて頂き、誠にありがとうございます。ございました。これからも、よろしくお願いします。現役の方、児研は本当にいい活動だと思います。今の自分の活動・役職に自信と誇りを持って、これからも頑張ってください。

(現役より)

〜つつちーさんの紹介〜

種族：大型雑食

生息地：浅貝

児研名：つつちー

性質：もたれかかっても倒れなそうな、頼りになるおいちゃん

成長度合：気持ちちは若者(?)

得意技：口

特記事項：近年、筋肉周辺に余計なものが・・・

攻撃呪文は「パバ〜」

土屋千尋

文学部人文社会科学科国文学専攻

【パート】 いくさばた子ども会・文化財

(株)エポック社

振り返ると、たった四年間とは思えないほどたくさんの思い出がきらきらと光っています。

それほどに、児研での時間は私にとってかけがえのないものです。

大学の中にいたら絶対に出会えなかっただろう、たくさんの小さな友人達の存在は、

就職した今も、いつも私を元気にしてくれる。パワーの源です。児研で出会ったすべてが私の宝物。今まで本当にありがとう。

（現役より）

↓殿下さんの紹介↓

・チーフとしてのリーダー格をもちながら、いつも可愛らしさあふれる人です。料理や裁縫を始め、なんでもできてまさにここがれの人です。たばさっ子の優しいお母さんの存在でした☆
・土屋先輩は一言で申し上げると凄く可愛らしい方でした。その上、とても落ち着いていらっしやって、非常に頼れる方でした。四年生ということで、そんなには活動を一緒にできませんでした。子どもたちにもとても好かれていらっしやって、本当に素敵な先輩でした。活動以外でも、私たち一年生にいつも笑顔で気さくに話しかけてくださって、いつも後輩のことを気にかけて頂いて、とても親しみのある先輩でした。本当に立派な方です。個人的に付け加えさせて頂ければ、先輩手作りのお菓子の味は生涯忘れません！

・すばらしきかな土屋殿下。いじられるとよろこぶ女帝です。
・ある意味児研の中で最も恩のある人。たばさに入れて下さっ

てありがとうございました。

徳留隼人

総合政策学部 【パート】 新橋

テレビ番組制作会社『アズバーズ』

児研は僕の大学生活に彩りを与えてくれました。おかげで抱えきれないほど沢山のたいせつな思い出を心に刻んで大学を卒業できました。でも、児研LIFEはこれからもまだまだ続きます。ここで培われた強い絆がこれから先の僕の人生にもあたたかくやわらかな光を注いでくれるからです。一生の仲間に出会えた児研は僕にとって最高のサークルです！

（現役より）

↓とくさんの紹介↓

自他ともに認める新橋のエース、背番号二〇。若さと元気あふれる背中と笑顔で、常に皆を引っ張ってくれました。徳さんのいない活動は少し寂しく、後輩も子供たちも、改めてその存在感の大きさを感じています。またいつでも、新橋のピッチに戻ってきてくれるのを楽しみにしています。

浜崎絵梨

法学部 政治学科 【パート】 新橋

プルデンシャル証券会社

こんにちはOG一年、法学部政治学科卒業の浜崎絵梨です

㊦㊦元新橋（ちと浅会にもお世話になったけど）部員！今はプルデンシャル証券会社の日本支社に勤務しています。

社会人になった今でもたま〜に新橋に顔を出していますので、みかけたら是非声をかけてくださいね（〇〇）ジケンで出会った友達や思いでは今の私にとって最高の宝物でもあり、今の私にとっての支えでもあります㊦㊦皆も、たくさ〜ん素敵な仲間をつくり、抱え切れない程の思い出を作ってね☆いつまでも心は学生だよ㊦㊦！

（現役より）

〜えりさんの紹介〜

不思議な雰囲気と魅力を合わせ持つ、後輩たちにとってはまさに「年上のお姉さん」といった感じの先輩。女の子たちに人気があり、その周りには常にぎやかな輪がありました。そういえば、探していたお稽古事は見つかったのでしょうか？楽しそうだったら、是非一緒にやってみたいですね。

福田真理子

法学部法律学科？ 【パート】 童話会

現在は資格取得を目指し勉強中です。兎研で得たものを大事に、これからも頑張っていこうと思います。今までどうもありがとうございました。

（現役より）

〜まりこさんの紹介〜

微笑をたたえ、やわらかい雰囲気を身にまとっています。紙芝居では、圧倒的な画力を披露。その絵のうまさに脱帽でした。

松田鉄平

文学部 【パート】 いくさばた子ども会

パナホーム株式会社

私が現在所属している部署は建築の設計部で、いずれ一級建築士になる道に立っています。塾生時代に、兎研で出会った仲間や子供達から学んだ事が沢山あり、いまはそれをバネにして自分の道に突き進んでいます。

（現役より）

〜松田さんの紹介〜

お忙しい中もたばさっ子のよきお兄さんとして活動されました。

聞くところによると、テニスはスカウトされるほどのプロ級の腕前とのこと。

今度たばさに遊びにいらしたときには、ぜひ子どもたちにも…いや、私たちにもテニスを教えてくださいね！

村松壮介

法学部政治学科卒 【パート】 童話会・新橋所属

太陽生命保険

どこのパートにいてもとにかく思いっきり楽しんでください！そして兎研でできた友達を大切にしてくださいね。きっと社会人になっても一生忘れない思い出になるはずですよ☆またみなさんの顔が見れる日を楽しみにしてます！

（現役より）

♪ソースケさんの紹介♪

気さくで話しやすい、フレンドリーな方です。

いりーさんと壮介さん、初めは似たイメージでしたがこの二人、似ているようでまったく違います。

山野辺俊一

理工学部 【パート】これが凄く微妙なんです、

4年次に在籍していたパートと解釈して、新橋としておきます。

慶應義塾大学院

大学生活では、兎研での活動を通して色々なことを学ばせてもらいました。

これらの事を色々な場面で役立てていけたらと思います。

お世話になった皆様、どうもありがとうございます。

（現役より）

♪のべさんの紹介♪

・集団を嫌い同士の愛する理工系天才肌。わかんないことはのべさんに訊け（というかなげっぱなせ！）というのが定評であった。ただし彼もなげっぱなしの達人なので、時として壮絶ななげっぱなし合戦が行われたものだ。でも結局最終的には受け取ってしまうのが、のべさんののべさんたるユエンか。ちなみにのべさんに「切られた」人間は、彼のケータイのメモリからひっそりとフェードアウトすることになる。

《たばさの先輩へ》

いくさばた子ども会チーフ寺村昌士と

ゲスト参加！たばさの謎のわんぱくGUY！少年H

による合体コメント（コント？）

※ 大変お見苦しいので子ども言葉使いはかなり丁寧にしてあります。内容は会話そのままです。

寺「基本的にはHのコメント載せるから。気合入れてしゃべっておくれ。」

H「何で僕なの？」

寺「こーいうのは若いもんのコメントがあつた方がいいもんなのよ。俺の先輩なんだから、もちろん俺より年上だろ？間違ひなく若さに飢えてるさ。（↑ごめんなさい）」

H「でも僕人知らないよ。」

寺「若いから大丈夫だ。よし、まずは土屋先輩ね。」

H「寺村さんの前の前のB O S Sだった人だよ。女のくせに生意気なんだよ。」

寺「お前いきなり世界の女を敵に回すようなことを…土屋先輩は立派な人なんだぞ。」

H「太刀川さんとどっちが立派なの？」

寺「え…そ、そりやお前、アレだよアレ。決まってるじゃねえか（焦）」

H「どれ…（ニヤニヤ）」

寺「だから…あ！オンリーワンよりナンバーワンなんだよ！いや違うか。ナンバーワンでオンリーワン？そう、みんな偉いさ。」

H「でも今は寺村さんが一番偉いんだよね？出世したなあ。」

寺「どうだろなあ。仕事増えただけな気もするんだけど…ってそんなことよりまだ辻川さんのこととか言ってるやないぞ。辻川さんってどうよ？」

H「え、誰？辻川さんって？」

寺「うわ、お前辻川さんを知らないのかよ。辻川さんはダンデ

ィーで男前で強い先輩なんだぞ。最後に雨の中話したことを今でも思い出すぜ。」

H「何で傘ささなかったの？」

寺「…男の会話に傘は必要ねえんだよ（↑かなり苦しい）」

H「辻川さんと寺村さんあどっちが強い？」

寺「ん？ん？。どうだろ。そんな目で見たことないからな。でも大先輩だからやっぱり負けるかな？」

H「寺村さんと太刀川さんはどっちが強いのか？」

寺「太刀川さん！（即答）もう完敗だ。」

H「寺村さんキン肉マンのテリーマンより強いんだよね？なら太刀川さんはキン肉マンより強いのか？」

寺「ああ。一発だ。」

H「結局一番強いのは誰？」

寺「書いてみるか。」

土屋先輩⇨太刀川先輩

寺村⇨辻川先輩

寺村⇨太刀川先輩

テリーマン⇨寺村

キン肉マン⇨太刀川先輩

寺「って、何をやってんだ俺は！！」

—こうして、たばさのお昼は平和に過ぎていくのでありました。
子どもたちは毎日元気にやっております。

完

（現役より）

土屋大輔さん

とても気配り上手で、その思いやりは見えないところから何
度も新橋の危機を救ってきました。後輩にも「ダイナさん」の
愛称で親しまれ、話していると安心感を与えてくれるような、
心の大きな先輩です。一緒に飲んだのはずいぶん前のことだ
が、またいつか飲みで一緒に緒したいですね。

萩原玲さん

独特の雰囲気、一度会ったら忘れない存在感となっていた
方です。チーフとして、童話会をきびきびとまとめてくださ
いました。仕事をきっちりこなす姿はカッコいいお姉さんとい
う感じでした。

キャラバン委員長より

キャラバンと一期一会

2004年度キャラバン委員長 廣澤勇也

今年の夏キャラバン先が、静岡県南伊豆町に決定しました。キャラバンとは、夏と春に行う人形劇・影絵劇の公演旅行です。（正確には夏キャラバンが文化財の活動で春キャラバンが全体活動であるが）

先の春キャラバンでは、群馬県下仁田町を訪れました。下仁田町は当時の四年生（今の81年生）が一年生の夏に、つまり初めて訪れたキャラバン先である。つまり、リピートキャラバンという趣旨である。

全キャラバン委員長の井上尚人氏がキャラバンという活動に関して「一期一会」という語を用いていました。

子供たちにとってはたった一日の劇公演。文字通り私たちの活動は一期一会ということです。・

前回の下仁田キャラバンはリピートでした。当時の四年生にとって、子供たちとは二回目の対面になります。

給食の時間を通して、私も子供たちと話をしましたが、驚くことに予想より多くの子供たちが、前回の劇公演のことを覚えていたのです。一回目のときはジャックと豆の木と二分間の冒険（ちなみに先ほどの春キャラバンではトム・ソーヤーの冒険とオペラ座の怪人）を行ったのですが、ジャックとか主役を覚えていたならまだしも、ほんのちよつとしかでないような脇役も完璧に覚えている子供がいたのです。

たった一日・一回見ただけです。

なるほど、確かにぼくらと子供のかかわりはたった一日・一回限りだが、劇をという媒体を通して一生子供たちの記憶に残っていくことも可能なのだ。私たちはそんな活動をしているのだと実感しました。

思えば、こんな素晴らしい「一期一会」はそうそうないので

はないでしょうか？

今夏の南伊豆町も現在の四年生が一年生の夏のときに行ったキャラバン先です。四年生は夏キャラバンに参加しないため私たち大学生にとっては、全く初めてのキャラバン先ですが、子供たちの中には二回目となる子供も存在します。

またさきほどの春で経験したような驚きを体験できるでしょうか？子供たちにそのくらいの思い出を残すことはできるでしょうか。

そんな思いを胸に、9月5日南伊豆へと旅立ってきます。



編集後記

編集後記

編集長 荒木紀子

「現代の若者は常に『自分さがし』をしている」

先日、大学での公演での筑紫哲也氏の言葉の一節です。

自分は一体何者なのか、自分の居場所はどこにあるのか、将来自分がすべきことは何なのか。焦ってみつけないとしても答えはすぐにでてこない。しかし、何かのために、誰かのためにやっているようにみえることが、実は「自分」というものを見つけるヒントになることがあるのだ、と。

今回、私はBONの編集長という役職から、皆様より一足先にBONの原稿を目にする機会を与えていただきました。読み進めていくと、活動の中での児研員の生き生きとした様子が思い浮かびます。そして同時に一人一人が、普段のパート活動や企画、全体活動を通して児研の仲間や子どもたちと関わっている中で、まさに「自分さがし」をしているのだと思いました。

長い人生の中で、大学生でいられる時間はほんの一瞬です。その中で何を思い、何を感じていたのか。BONはそれを記録したものの一つだと思います。これから大学を卒業して社会人となり、再びBONを見ることになった時、BONがその時の

自分を元氣付けてあげられるような存在であってほしいと思います。そのために「今」という一瞬一瞬を大切にし、おもいきりやりたいことをやる、ということが大切なのだと思います。現役の皆さん、これからも一緒に「自分さがし」を頑張りましょうね。

最後になりましたが、お忙しい中原稿を書いてくださった四年生や卒業生の皆さん、誰一人提出期限を過ぎることなく原稿を提出してくれた二年生、突然の原稿依頼でもすぐに対応してくれた各パートチーフや幹事長、そしていろいろ相談にのってくださったアドバイザーやくださった方々、本当にありがとうございました。おかげさまでなんとかBONが完成いたしました！

そして、最後まで読んでくださったOB・OGの皆様、ありがとうございました。これからも児童文化研究会を末永くよろしくお願い致します。



